

武蔵野日曜聖書講筵

神は棄てず

――詩篇第71篇――

1992年9月6日

小池辰雄

キリストの中に祈り入る 聖意体現を義という 与える義 贖いにより義を賜る 汝はわが避
所 永遠の現在化 キリストの中に棄身すると聖霊の世界に入る 旧約をキリストの光で読む

【詩篇71】

1 エホバよ我なんじに依頼よりのたのむ。

ねがわくは何の日までも恥いづれづることなからしめ給え。

2 なんじの義をもて我をたすけ我をまぬがれしめたまえ。

なんじの耳をわれに傾けて我をすくいたまえ。

3 ねがわくは汝わがすまいの磐いしとなりたまえ。

われ恒つねにそのところに往くことを得ん。

なんじ我をすくわんとて勅命みことりをいだしたまえり。

そは汝はわが磐わが城なり。

4 わが神よあしきものの手より不義残忍なる人のでより

我をまぬかれしめたまえ。

5 主エホバよ、なんじはわが望みなり。

わが幼少おさなきよりの恃たのみなり。

6 われ胎をはなるるより汝にまもられ

母の腹にありしときより汝にめぐまれたり。

我つねに汝をほめたたえん。

7 我おおくの人にあやしまるるごとき者となれり。

然どなんじはわが堅固なる避所なり。

8 なんじの頌辞たたえごととなんじの頌美ほまれとは終日わが口にみちん。

9 わが年老ぬるとき我をすてたもうなかれ。

わが力おとろうとき我をはなれたもうなかれ。

10 わが仇あたはわがことを論あげつらい、

わが靈魂たましひをうかがう者はたがいに議はかりていう。

11 神かれを離れたり彼をたすくる者なし、



かれを追いてとらえよと。

12 神よわれに遠ざかりたもうなかれ。

わが神よとく来りて我をたすけたまえ。

13 わがたましひの敵ははじ且おとろえ

我をそこなわんとするものは謗と辱とにおおわれよ。

14 されど我はたえず望みをいだきていやますます汝をほめたたえん。

15 わが口はひねもす汝の義となんじの救とをかたらん。

われその数をしらざればなり。

16 われは主エホバの大能の事跡をたずさえゆかん。

われは只なんじの義のみをかたらん。

17 神よなんじわれを幼少より教えたまえり。

われ今にいたるまで汝のくすしき事跡をのべつたえたり。

18 神よねがわくはわれ老て頭髮しろくなるとも

我がなんじの力を次代にのべつたえ、

なんじの大能を世にうまれいづる凡てのものに宣伝うるまで

我をはなれ給うなかれ。

19 神よなんじの義もまた甚たかし。

なんじは大いなることをなしたまえり。

神よたれか汝にひとしき者あらんや。

20 汝われらを多くのおもき苦難にあわせたまえり。

なんじ再びわれらを活しわれらを地の深所よりあげたまわん。

21 ねがわくは我をいよいよ大いならしめ

帰りきたりて我をなぐさめ給え。

22 わが神よさらばわれ箏をもて汝をほめ

なんじの真実をほめたたえん。

イスラエルの聖者よ、われ琴をもてなんじを讃うたわん。

23 われ聖前にうたうときわが口唇よろこび、

なんじの贖いたまえるわが靈魂おおいに喜ばん。

24 わが舌もまた終日なんじの義をかたらん。

われを害わんとするもの愧惶つればなり。

●キリストの中に祈り入る

今、歌っていただいた讚美歌512番「わが魂の慕いまつる」の歌詞のうち、

「わがたましひの したいまつる イエス君のうるわしさよ」



とある。キリストはおよそ「美しくない」「見栄えがない」と、イザヤ書53章に書いてあるけれども、キリストの美しさは内側の、もの凄いい、魂の美しさなんです。この「うるわしさ」は魂の美しさを言っている。外側はうるわしくない。「あしたの星」というのは、黙示録の終りの方にある言葉で、明星という。「谷のゆり」は、ゆりは復活の象徴だから、まあいいでしょう。2節の

「ひとは棄つれど きみはすてず」

という。今日は、『神は棄てず』という題で、詩篇の71篇をお話します。

詩篇71篇は、私の著作集『詩篇珠玉集』には出ていない。この中の大事な所に触れていきます。これは、年をとった人が神さまに、

「なお棄てないでください」

という、そういう気持の詩なんです。老境に入っている。

〔柳田邦男氏の小池先生に関するエッセイの朗読は割愛〕

「エホバよ我なんじに依頼む」

「よりのたのむ」という言い方はヘブライ語では、

「汝を隠れ家とする」

という意味です。汝の中に隠れている。

「エホバはわが避け所」

という言葉があるでしょ。あの「避け所」です。「隠れ家」。私たちにとってはキリストが隠れ家です。よく、教会堂の中に隠れて行ったり、お寺の中に入っていたりする。ああいうわけです。私たちは、そんなお寺でも教会でもない、キリストの中に入っていく。キリストご自身が「避け所」です。

「避け所」というと、何か卑怯で逃げていくようだけれども、卑怯で逃げていくのではなくて、ここに入ると本当の力がくる。キリストは聖霊が満ちている人ですから。キリストの中に祈り入る、帰り入るわけです。祈入、帰入。入らなければダメです。

「汝の中に逃がれ行く、隠れ行く」

と。それが「よりのたのむ」という訳になっている。

ねがわくは何の日までも恥うくることなからしめ給え。

「いつまでも」ということ。「永遠に」とよく訳されるヘブライ語です。

2 なんじの義をもて我をたすけ我をまぬがれしめたまえ。なんじの耳をわれに傾けて我をすくいたまえ。

「私を自由にしてください。解放してください」と。

3 ねがわくは汝わがすまいの磐となりたまえ。われ恒にそのところに往くことを得ん。なんじ我をすくわんとて勅命をいだしたまえ。そは汝はわが磐



わが城なり。

4 わが神よあしきものの手より不義殘忍なる人のてより我をまぬかれしめたまへ。

「救いの磐^{いわ}」^いという言い方はよくする。

「汝はわが磐わが城なり」

という言い方も詩篇によく出てくる。要するに、磐^{とりで}であり城であり、磐である。

●聖意体現を義という

ところで、大事なのは、

「汝の義をもて我を助ける」

という言葉がある。これが、ルターには躓きになっていた。「義で助ける」とは何ごとか、と。この詩篇の背景はイザヤ書です。イザヤ書51章、

「義を求めエホバを尋ねもとむるものよ我にきけ……⁵ わが義はちかづきわが救いはすでに出^{いで}たり。わが臂^{かひ}はもろもろの民をさばかん。もろもろの島はわれを俟望^{まちぞ}み、わがかい^{かい}な^なに依頼^{よりたの}まん。⁶ なんじら目をあげて天を觀^み、また下なる地をみよ。天は烟^{けむり}のごとくきえ、地は衣のごとくふるび、その中にすむ者これとひとしく死なん。されどわが救いはとこしえにながらえ、わが義はくだることなし。」(イザヤ51・1〜6)

「救」という言葉と、「義」という言葉が同義語的に使つてある。「義がなぜ救いか」と。「愛」なら、救いだというのは分かるけれども、「義」だという。第二イザヤでは、義と救が同義語的に使われている。そのことを、サウロは読んだ。そして、ローマ書の3章でそのことを言っている。

「然るに今や律法^{おきて}の外^{ほか}に神の義は顯れたり」(ロマ3・21)

「律法の義」というのがある。

「律法の義については自分は責むべき所がない」

という。

「律法を拳々服膺して間違いなくやつている」

というのが律法の義というわけです。

「道徳をちゃんと守っている」

なんて一生懸命で言っている。それを律法の義という。ところが、それは苦しいんだ。ルターはそれを非常にやったわけだ。戒めを、律法をしっかりと守って一生懸命にやっているけれども、ひとつも嬉しくない。苦しい。義は裁こうとしてないのだけれども、義によって裁かれてしまうんだ、こつちがどうもダメなものだから。ところが、

「律法の他に義が顯れた」



という。これがパウロの初めての言葉です。

「これ律法と預言者とに由りて証せられ、イエス・キリストを信ずるに由りて凡て信する者に与えたもう神の義なり。」(ロマ3・21～22)

という。パウロは、

「義人なし、一人だになし」

と言っている。

「キリストだけが義人だ」

と。この「義」というのは「正義」ではない。神の聖意を、聖なる意志を全存在で現ずる、体現する、聖意体現者を「義人」という。聖意体現を義という。

縦の関係で、お父さんやお母さんの仰ることを、「はいっ」と言つて文句なしに守っている。そういう子供は本当の子供なんだ。今の子供は、すぐ何か理屈を言つて、何のかんと言っている。しかし、無条件に「はい」と言うこと。私の兄貴はお母さんの言うことを

「はいっ、はいっ」

と言つて実行していた。

●与える義

ところが、人間はこれは本当はできない。或る時はできても、本質的にはできない。神さまの意思に逆らう。「アダム・イブ」は神さまの意思を守らなかった、従順ではなかった。それは、何もアダム・イブのことでない。我々一人ひとりの現実なんです。

そういう聖意体現の、

「キリストの義を無条件にお前にやるぞ」

という。これが「神の義は律法の他に顕れた」義なんです。キリストが顕した義を与える。「与える義」なんです。審く義ではない。これが救いになるわけです。できない者に、「できた現実」を与えてくださる。それを

「ありがとうございます」

と受けとる。キリストの義というのは何かというと、キリストそのものなんです。キリストそのものを与えている。キリストそのものをいただいているわけです。だから、

「私に連らなつていろ、私の中に入つていろ、そうしたら、義でも愛でも智慧でも生命でも何でもやるぞ」

と。だから、キリストの中に入らない限りは、本当の救いにはならない。「罪を赦された」という命題を信じたつて、どうにもならない。よく

「罪の赦し、罪の赦し」

と言っているね。罪のままでいいんだ。罪の赦しはもう十字架で赦されているんだから。

「赦してください」



ではない。

「あなたは私を赦してくださいました。ありがとうございます」

と、その他何も言うことがない。

「それだったら、お前は遠慮なしに入ってこい」

と。そうすると、この生命の、義の、光の、愛の世界に入ってしまう。だから私は、

「信仰の仰の字は仰いでたつてダメだ、キリストの中に交わる世界に入らなければ

ダメだ」

と言っているわけです。信仰でなく、

「信交、

です。「精神の若々しき」の源泉はここにあるわけです。キリストの力、キリストの生命、キリストの若々しき、死んでも死なない生命です。

使命のある限りは、人は生きます。使命感がなかったらダメなんです。ただ長生きするということではない。一人ひとりみな使命を持っている。その人でなければならぬ使命がある。今の教育は、使命感をもたせることを全然やってない。「どういうことをすれば暮らしに困らない」なんてことばかり考えている。藤井武先生が、

「真理のためには死んでもいい」

と言っていたけれども。藤井先生は「真理」という言葉が一番好きだった。常に前向きで生きなさいよ。

「あの人は過去にこんな事をした、こんな事を言った」

なんてことばかり考えていたら、自分自身がダメになる。

義は与える義だから、

「義によって救う」

とはそのことです。その詩篇の言葉をパウロはキリストの福音の力で読んだ。それは中には、旧約の中には、

「律法に従っているから、それは義であるから、それで救ってやる」

という、相対的な意味に解する者もいたでしょう。それではダメなんだ。それでは「律法の義」になってしまう。パウロはそうだった。

「律法の義につきては責むべきところなし」

と。自分は義人だと思っていた。それはとんでもない大間違いだった、と後で分かった。

「儀文は殺し、霊は活かす」

と、パウロが言った。霊とはキリストの御霊の世界。これが本当に活かす。ロマ書8章の1、2節。だから、

「信ずる者に与えたもう神の義なり」

と、パウロはロマ書3章21、22節ではつきり言っている。



●贖いにより義を賜る

「キリストを信ずる」とは、

「キリストを受けとる」

です。キリストは神の子である事を信じたつてしようがない。「キリストを受けとる者は」ということ。「信ずる」という言葉がまた躓きになる。困ったものだ。受けとればいいんだ。あるいは、キリストの中に入ればいい。

「われ汝のうちに、汝わがうちに」

というのがパウロの世界だから、私たちは、

「エン・クリスト」

と言っているんだ。「キリストの中に」ということ。皆さん、「エン・クリスト」という言葉をお題目にしたらダメですよ、現実にしなければ。

「功^{いさお}なくして神の恩恵^{めぐみ}により、キリスト・イエスにある贖罪^{あがない}によりて義とせらるるなり。」(ロマ3・24)

「神の恩恵」というのは、キリストが恩恵の主体ですから、

「神の恩恵により」

ということとは

「キリストにより」

ということ。「義とされる」という言い方がやはりヘブライ的な言い方なんです。

「贖いにより義を賜った」

ということです。よく神学で

「信仰義認」

と言うが、ああいう言い方は私は嫌いだ。「義を認める」のではない。義を賜^{たまわ}る。賜りたる義なんです。認められたつてしようがない。いわゆる神学的な述語はダメなんだ、逆に躓きになる。本当の神学は神学を笑う、神学をけなす。

「凡ての人、罪を犯したれば神の栄光を受くるに足らず」(ロマ3・23)

「凡ての人、罪を犯したれば」とは、

「すべての人は罪びとであるから」

ということ。本質的にしようがないんだ、どうにもならないんだ、誰も。救いがなければ、どうにもならない。

「私は救いを要らない」

なんて言える人があったら、それは傲慢なんだ。イザヤ書51章とロマ書3章は詩篇71篇の、

「義によつて救う」

ということと非常に相応じています。

5 主エホバよ、なんじはわが望みなり。わが幼少^{おさなき}よりの恃^{たの}みなり。



作者は相当年配のひとです。

「なんじはわが望みなり」

というのは非常に明るい言葉です。福音の望みというのは必ず成就する望みです。

「望みが達せられるだろうか」

なんていうのは望みではない。それは願望だ。望みも愛も信もみんな上からくる。信・望・愛は全部上から来ます。

与えられざるものは本ものではない。みな無条件に与えられるものが本もののなんです。本ものがくると、今度は、こつちから

「よしっ」

と言って、やる力が来るから、努力が努力でなくなる。いただいて、それつ切りではない。それで何か事が始まる。その行為はその本ものの力による。だから、他と自とが一つとなつているから、他力だか自力だか分らないところだ。パウロがそのことを言っている。

「既に与えられたから、いよいよもって追求する」

と言っている。そのパウロの言っている通りです。与えられたから、いよいよもって追求する。その追求はいわゆる努力とは違う。楽しい追求なんです。

「与えられましたから、おしまい」

だったら、それは腐つてしまう。追求して、そしてこれをまた人に与えていかなければ。福音は人に与えていかなかたったら、生命がなくなってしまう。だから、伝道せざるを得ない、人に伝えざるを得ない。みんな

「ざるを得ない」

世界です。

電車に乗ったって、隣の人に語らざるを得ない。何も、すぐお説教を始めるようなことは必要ない。話しているうちに、自然にそうなる。まず、

「チヨコレートを食べませんか」

と。言葉よりかまず食べ物を与えた方がいいよ。それから言葉だ。

「チヨコレートはいりません」

なんて言ったら、やめてしまえばいい(笑)。まあ、半分冗談ですけども、全く本当です。

●汝はわが避所

6 われ胎をはなるるより汝にまもられ母の腹にありしときより汝にめぐまれ
たり。我つねに汝をほめたたえん。

7 我おおくの人にあやしまるるごとき者となれり。然どなんじはわが堅固な
る避所なり。

正にそうなんだ。7節はおもしろいね。ひとには変てこに思われる。



「あいつは少し変わり者だ」

と。ということは、

「あなたは本当の私の避け所だから、私は避け所で力をいただいているから、そこで、人にはおかしく思われる。おかしく思われるのが本当なんです。ありがとうございます」

ということだ。「汝はわが避け所なり」が原因です。これがもただから、人にあやしまれてくる。あやしまれるのは、いい意味にも悪い意味にもある。どっちだっていいよ。

「あの人は不思議な人だな。何か変てこだな」

と、どっちでもいい。要するに、こつちが本ものなら。しかし、あやしまれた後は、本当は人に慕われるようになる。

「やつぱりあの人は本ものだ。宗教臭くないけれども本ものだ」

と。いわゆる宗教臭いのはダメだ。ふたこと目にはすぐ信仰の話なんかする必要は何もない。ことに女の方は理屈は要らん、愛があれば。キリストから来る愛が一番大事です。

8 なんじの頌辞たたえこととなんじの頌美ほまれとは終日わが口ひねもすにみちん。

9 わが年老ぬるとき我をすてたもうなかれ。わが力おとろうとき我をはなれたもうなかれ。

まあ、詩篇ではそう言っているけれども、

「私は年をとつても、あなたは棄てませんね」

と、それでいいんだ。

「さつぱり棄てませんね。人はけなしたり、棄てたりするけれども、あなたは棄てません」

と。だから、私は

「神は棄てず」

という題にした。「棄てないだらう」ではない。必ず棄てません。

「人は棄つれど、君は棄てず」

と、あれはいい讚美歌だ。

10 わが仇あたはわがことを論あげつらい、わが靈魂たましひをうかがう者はたがいに議はかりていう。

11 神かれを離れたり彼をたすくる者なし、かれを追いてとらえよと。

12 神よわれに遠ざかりたもうなかれ。わが神よとく来りて我をたすけたまえ。

詩篇の世界はやはりキリスト以前の世界ですから、お願いが非常に多い。ところが、福音の世界に入ると、お願いよりも、

「あなたはこうしてください。ありがとうございます」

という感謝の方が多い。詩篇も終りの方はよく、感謝にもなっているけれども。本当の現実を受けとつていれば、感謝の他はないんだ。



「私は今、病気ですけれども、本当は病気ではありません。あなたの力がきてますから」

という、そういう角度です。

●永遠の現在化

¹³ わがたましひの敵ははじめおとろえ我をそこなわんとするものは謗と辱とにおおわれよ。

¹⁴ されど我はたえず望みをいだきていやますます汝をほめたたえん。

「あなたから来る望みをいただいて、望みを現実として、ますますあなたの聖名を讃え奉る」

ということ。二千年前の十字架の贖いが現在であり、最後の新天地が来るところも現在である。全部、「永遠の現在」化していくわけです。過去を救い上げ、未来を近寄せる。それが本当の永遠の世界です。現在がもの凄く光っている。現在がもの凄い生命の世界です。相対的現実の奥にももの凄い根源の現実を持っているから負けない、行き詰まらないんだ。

「どうも、うまくありません」

ではない。常に勝っています。現実がどんなに不如意であっても、絶対にへこたれない。いろんな病気を背負いながら、賀川豊彦があれだけの働きをしたではないですか。大変なひとだよ、普通だったら、身体がもたない。

¹⁵ わが口はひねもす汝の義となんじの救いとをかたらん。われその数をしらざればなり。

「汝の義は即ち汝の救い」とちゃんと書いてある。数ではないんだけど、まあ、仕方がない。

¹⁶ われは主エホバの大能の事跡をたずさえゆかん。われは只なんじの義のみをかたらん。

¹⁷ 神よなんじわれを幼少より教えたまえり。われ今にいたるまで汝のくすしき事跡をのべつたえたり。

¹⁸ 神よねがわくはわれ老て頭髮しろくなくとも我がなんじの力を次代にのべつたえ、なんじの大能を世にうまれいづる凡てのものに宣伝うるまで我をはなれ給うなかれ。

恩恵を伝えざるを得ない、と。「汝の力」という字はむしろ「腕」という字からきている。

「大能の事跡」

とはこれもロマ書一章に出てくる言葉です。この詩篇は非常に「義」という字が使っている。

¹⁹ 神よなんじの義もまた甚たかし。なんじは大いなることをなしたまえり。

神よたれか汝にひとしき者あらんや。



20 汝われらを多くのおもき苦難にあわせたまえり。なんじ再びわれらを活か
しわれらを地の深所よりあげたまわん。

21 ねがわくは我をいよいよ大いならしめ帰りきたりて我をなぐさめ給え。

22 わが神よさらばわれ箏をもて汝をほめなんじの真実をほめたたえん。イス
ラエルの聖者よ、われ琴をもてなんじを讃うたわん。

「イスラエルの聖者よ」

という言い方は、詩篇にはこの他にあと二箇所しか出てない。この言い方はイザヤ書の言
い方なんです。だから、この詩篇はイザヤ書が元になっていることが分かる。

23 われ聖前にうたうときわが口唇よろこび、なんじの贖いたまえるわが靈魂
おおいに喜ばん。

24 わが舌もまた終日なんじの義をかたらん。われを害わんとするもの愧惶つ
ればなり。

「なんじの贖いたまえる」

といつても、新約的意味の十字架ではないですけども。非常に「義、義」と言っている。
そして、それが「救い」だと。

「エホバの御意」

が義なんです。

「その御意の素晴らしさを語ります」

と。また、御業も義なんです。それは同時に愛なんだけれども、「愛」という言葉は使わない。
「サタン之力から救い出す」

ことが、この「贖い」という言葉です。サタンの力から救いだす、そのあなたの業、御意、
それが義なんです。だから、義と救いが一つになってくるわけです。新約の角度からいえば、
言うまでもなく、キリストです。キリストがその義を無条件に十字架を通してくださった。

●キリストの中に棄身すると聖霊の世界に入る

パウロという人は、或る所ではもの凄く「愛」のことを言うかとおもうと、また、「義」
のことを言う。パウロはロマ書9章で、

「²我に大なる憂いあることと心に絶えざる痛みあることを我が良心も聖
霊にありて証す。³もし我が兄弟わが骨肉の為にならんには、我みずから詛
われてキリストに棄てらるるも亦ねがう所なり。」(ロマ9:2~3)

と。キリストは神さまに棄てられた。

「わが神、わが神、なんぞ我を棄て給うか」

と言われた。

「神さまはキリストを棄てない」



と思った。人がその罪のために神さまに裁かれ棄てられる、それを全部引き受けた。それが、このキリストの棄てられた事なんです。だから、キリストは必ず甦って、そして今度は、人を救うところの、復活の生命、聖霊の賦与ということになった。だから、我々は

「棄身^{すてみ}」

ということを使う。棄身でやる。棄身の態勢でいくと、神さまは棄てないというわけです。棄身でなければダメなんだ。神さまに棄てられると言ったって――十字架で、キリストは棄身の最高のことをやった。これは棄身の愛なんだ――そうしたら、神さまは驚くべく、キリストを上にあげてしまつて、聖霊を通して、万人を救済する元にした。

「己を愛することは最も悪いことだ」

と、棄身の反対です。では、棄身とは、どこへ棄てるのですか？ キリストの中へ棄ててくださいよ。そこらへ棄てるのではない。キリストの中へ棄身する。

「私はいません、キリストが私の中にいます」

と、パウロが言っているのがそれなんです。

「われキリストと共に十字架せられたり。最早われ生くるにあらず。キリスト

わがうちに在りて生きたもうなり」(ガラテヤ2・20)

「私はキリストの中へ棄身した。十字架されて棄身しました」

と。これは棄身の態勢です。キリストの中に棄身すると、聖霊の世界に入る。

私たちはキリストの中に棄身せざるを得ないわけです。そういう棄身は本当の力になる。だから、棄てられない。棄身の態勢でない人は、ヘタすると棄てられるかもしれない。棄身の態勢のひとは棄てられない。何となれば、キリストの中にいるから、神さまは棄てない。

「果たして、私はキリストの中にいるでしょうか」

ではないですよ。こちらのこうではない。キリストの中は絶対の恩寵の現実です。

私たちは空気から出ることができますか。空気の中にいて空気を吸っているでしょ。そのように我々の魂は、

「主さまー」

と心の中で叫べば、直ちにその現実キリストの中という、そういう祈りの世界に入らなければ。祈ってからキリストの中へはいるのではない。祈ると同時にキリストの中に入る。「祈り入る」ということはそういうことだ。そういう非常に簡単な現実なのに、何か非常に面倒臭いことにしてしまっている。

●旧約をキリストの光で読む

何といつても、パウロは大変なひとです。パウロのこの告白がなかったら、新約聖書は成り立たない。それだけキリストに捕らわれているということですよ。ヨハネだけではダメなんだ、パウロでなければ。ヨハネはスーッといつているようなひとだね。女の方はヨハネ



的でいいよ。男はどうも、パウロのように屈折していく。ペテロは波のようだ。パウロとなり、ヨハネとなり、ペテロとなる。この聖霊の世界に入ると、自由に、そうなる。皆どれでもちゃんとつかめる。仏教の偉大な坊さんのこともキリストの光でよく分かる。キリストの中に入ると、凡てを包摂してしまう。凄いですよ。それを、

「キリスト教」

なんて言つて、何か狭つくるしくして、

「仏教には十字架がないから」

なんて、そんなことをやっているうちはダメなんです。

そういう意味で、大きな魂はドイツではゲートです。ルターは三角形、ゲートは円形だ。円現する世界です。そのゲートも、

「キリストの前には無条件に頭を下げる」

と言った。大変なひとです、イエス・キリストは。説明なんかできるものではない。キリストを生きる他に仕方がない。キリストを生きることが本当の説明だ。聖書は読んでいと、楽しいでしょ。楽しくならなければね。

この言葉は忘れませんよ。ルカ伝12章49、50節。

「49我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。50されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまでは思い逼ること如何許ぞや。」

「火」とは聖霊のこと。

「聖霊があなた方に本当に燃えたら、その火は消えることはないから、もう望むことはないんだ」

と。キリストだけが受けるバプテスマは十字架のことです。

51われ地に平和を与えんために来ると思うか。われ汝らに告ぐ、然らず、反つて分争なり。」(ルカ12・49、51)

本当の世界にはいると、争いが生ずる。いわゆる争いではない。死ぬか生きるかの真理の戦いだから。そして、それは本当に相手を救う戦いなんだ。倒す戦いではない。相手を救い上げる戦いです。戦いという言葉は、人を殺したり倒すことかと思つたら、相手を救い上げるのが本当の戦いなんです。

「十字架を通つてから、お前たちに火を投ずる。地上では火は投じなかった」

というわけです。これがペンテコステの聖霊降臨なんです。ちゃんとその順序になつて、切つても切れない関係になつてゐるのに、十字架と聖霊をいい加減にしているからね、いつまでたつても。「十字架、十字架」と言つてみたり、「聖霊、聖霊」と言つてみたり、どちらもダメだ。旧約を読むときは、必ずキリストの光で読んでくださいよ。

